様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４３６１

研究課題名（和文）思春期ASD女子を対象にしたグループプログラムの応用行動分析的検証

研究課題名（英文）Effects of an Approach in Applied Bahavior Analysis for ASD Adolescent girls group

研究代表者
佐田久　真貴（Sadahisa, Maki）

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：１０４４１４７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では，思春期ASD（自閉スペクトラム症）とその特性のある女子に限定した少人数のグループ活動の実践とその応用行動分析（ABA）的検証を目的としている．研究期間では2つのグループを実施することができた．個々の課題に応じたケースフォーミュレーションとグループの効果による課題解決や特性理解の促進，獲得しているソーシャルスキルの発揮などが確認された．参加者の満足度は高く，仲間へのかかわり方がより良好かつ適応的な表現に変容した．一方で，ASD女児・女子の特性の現れ方，変容過程を検証し，早期発見・介入の困難さの背景に言及した．本研究は本人や家族，社会的にも非常に意義ある実践研究である．

研究成果の学術的意義や社会的意義
　DSM-5ではASDは女性よりも男性に4倍多く診断されること，臨床例で知的能力障害または言語の遅れを伴わない女児は認定されずにいることを指摘した（APA,2013）．本邦もASD女子たちの早期発見と支援が遅れていることが指摘されている．本研究では2グループを実施することができ，個々の課題にはABAによるアプローチの効果が認められ，グループ内では相互の理解や自身の特性理解の促進という効果が得られた．保護者によるPERS-TRでは，幼少期と思春期の特性の現れ方を検証したところ，女児・女子の早期介入の難しさが示唆された．彼女たちを養育する保護者への臨床心理学的支援は重要な課題の１つである．

研究成果の概要（英文）：　The aim of this study is continuation of the clinical practice of the group program for ASD Adolescent girls and making the effect clear by ABA. The participant was separated according to development age by two groups. Approach of ABA is effective in a problem of the each girl. This group functioned as the place where girls consider a device and a countermeasure together.
Program contents were constructed with the goal of characteristic of own and being troubled, and finding the self-understanding. In addition, I adopted the activity for knowledge and the skill formation as the girl. It was high in the satisfaction of the participant. On the other hand I inspected how to appear and the change process of the special quality of the ASD girl. This study is the action-training-research very significant for a ASD girl, the family and society.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ASD女子　思春期　ABA　ケースフォーミュレーション　グループ　特性理解

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害（以下，ASD）など特別な配慮を必要とする児童・生徒への支援プログラムが様々な機関で開発・実施され，その効果や課題が数多く報告されている．しかしながら，女子のみを対象として開発されたものの報告は少ないのが現状である．Fombonne（2003）によると，圧倒的に ASD 女子の発生率が少ない．我が国においても ASD 女子たちの早期発見と支援が遅れていることが指摘されている（川上，2012）．女子の場合，幼少期に自閉症の要素が目立っていても，成長と共にその症状が変容し，男子に多く見られるような攻撃性が少ない等の特徴から，徐々に支援の手が届かない実態があることが示唆されている（Shimone, 2010）．ところが，周囲と自身の違いに気づいて自己を表現することを抑制しやすく，さらに感覚過敏やホルモン変化等からの心身の不調に耐えながら生活を送っている ASD 女子が多いのではないかと予測される．このように，ASD の特性からくる問題や困っていることを抱えたまま，支援を受けずに学校や社会生活に適応しようと努力している女子は多く，その延長上で 2 次障害といわれる症状を呈することもあるだろう．初潮を迎えたり，女子同士のグループ行動が増えたり，同級生が興味を抱くことには関心が持てなかったりなど，女子特有の問題や悩みが成長と共に増えていく．それゆえ，より一層，丁寧にかつ繊細に扱う必要性が高いと思われるが，実際には上述した理由から，女子に特化した支援体制が発展してこなかったのではないかと考えられる．

田ノ岡（2012）によると，女子グループの効果として「保護者や本人だけで解決しにくいことが，集団であることや仲間を意識することによって，日常生活のスキル獲得と問題の解決，さらには不安の軽減，自己効力感の増加，将来についての目標を含めた自己肯定感の向上につながる」と述べている．構造化された環境の中で，ASD の特性のある仲間と出会い，互いに語り合える機会は，彼女たちの成長を促すリソースの１つとなると考えられた．

また，応用行動分析の考え方は，従来の心理療法とは異なっている．本研究では発達段階や成長に応じた女子特有の問題を，個人の「心の中の働き」であるとは考えずに，「個人と環境との相互作用」からとらえ，女子に必要な行動レパートリーを増やしていくよう支援する．この介入方法の中に，ストラテジーとタクティクスの関係性が存在しており，この関係性を効果的に活用したテクニックを臨床現場へ還元し，包括的な支援として展開していきたい．

２．研究の目的

自閉スペクトラム症（autism spectrum disorders; 以下，ASD）女子を対象とした臨床心理学的研究は国内外でも注目されつつも，学術研究としては数少ない領域である．申請者は成長期の ASD 女子を限定とした応用行動分析的グループプログラムの立案と実践研究から，ストラテジー（strategy;戦略）とタクティクス（tactics;戦術）の関係性を重視した臨床テクニックの有用性を明らかにしつつある．本研究では，実践事例の縦断的効果検証と新規事例の積み上げを行い，ASD 女子グループ支援の臨床プログラムを発展させ，その意義と必要性を明確にすることを目的とする．

３．研究の方法

（１）グループの概要

発達障害のある女児・女子を対象にしたグループ「あでりーくらぶ」は筆者（以下，Th）が運営している応用行動分析（以下，ABA）を基盤にしたグループである．臨床心理学を学んでいる大学院生がスタッフとして参加している．グループ構成員は学年，特性等を考慮し，Th が構成し、本研究では 2 つのグループを運営することができた．各グループは月 1 回の頻度で開催した．1 回約 90 分とし，プログラムは「気分の確認」「学びの時間」「エクササイズ」「茶話会」「ふりかえり・アンケート」とした．「学びの時間」は，それぞれの課題や困っていることをターゲットとし，ABA の考え方やワークを実践する．「エクササイズ」では，女子集団で共有できる話題，活動を用意する．おおまかな活動の流れを表１に示す．

表 1　活動の流れ

親子面接	アセスメント
受付	名札をつけて準備
気分シート	１週間の気分を振り返る （高校生以上には短縮版 POMS 青少年版を実施）
学びの時間	障害特性や困り感に焦点をあてた内容で個別対応が中心（ABA 的介入）
エクササイズ	・女の子同士で“おしゃべり”を楽しむ場面にする ・季節に関連する創作作業をとりいれる
茶話会	自由な構造とした
アンケート等	振り返りを行い、次回の活動内容を予告
保護者への伝達	必要時に実施

（２）

①各グループの実践内容と対象者の言語行動の変化、②個別介入の実践報告、③PERS-TR の評価、の 3 点について報告することとする．

４．研究成果

（１）言語行動の変化から

ASD の正しい理解と心理教育，そして共感しあえる安心感のある仲間集団は，彼女たちの健全な心理的発達を促進し,必要なときに援助要求ができるスキルにもつながっていくと言える．本グループ参加者の「グループ満足感」は高く，活動中の言語反応と実施後アンケートを検証すると、「自分のこと（自分の興味関心の話題）」よりも「特性について」の発言数が増加していく変容が認められた．また、学校場面で苦手だと感じていること（例えば、自発的に会話に入っていくこと､質問すること等)をグループ内で練習しようと自発的に試みる行動も生じた．これらの適応的かつ肯定的な変容効果をみると、本グループのような構造化された環境での心理教育と仲間集団の必要性は明らかだといえる．ASD の特性として「共感性に乏しい」と言われることはこれまでも多かったが，ASD のある者が皆，決してそうではない．成長過程の中で彼女たちは相互に尊重し，認め合い，気遣いができるスキルを獲得しており，そのスキルを存分に発揮し，自信を得られる環境が必要なのだと言える．

（２）実践報告

それぞれ個々の課題や問題には ABA によるアセスメントとアプローチを行った．個々の課題に関して，ここでは具体的な記載を控える表現で報告する．

①事例 A

問題行動 C をやめたいと訴える A 子へ 1 回 30 分, 計 9 回のセッションが実施された．心理教育では，習癖（くせ）のメカニズムと対策案，類似の問題行動体験者の情報等のオリジナル資料を用いた．ホームワークでは，問題行動 C に拮抗する適応的な代替行動の試行とセルフモニタリングが導入された．その結果，問題行動 C を制御できる自分自身に気付き，複数の代替行動が増加，問題行動 C 自体も減少した（図 1）．効果は半年後にも維持されていることが確認された．問題が維持・増大しないためには援助要請スキルは必須であり，そして支援者・介入者側にとって，その問題に対処できる支援のタクティクス（戦略）は ABA とオーダーメイドの介入計画で発揮されると言える．

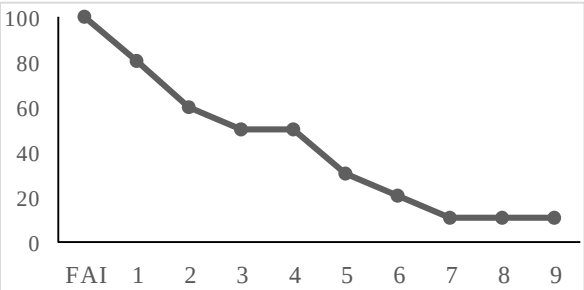

図1　行動Cの推移

個々の事例は千差万別で，クライエントの訴えること，変容したいと考えていることに対してセラピストはクライエントに寄り添い，問題や困り感を解消，もしくは“問題とどう付き合っていくか”を見出す過程には,“協働”は必要不可欠である．

②事例 B

問題行動 D が突然生じたことが保護者から報告され, その直後より ABA による介入を行った．介入当時, B 子は公立中学普通学級 2 年で WISC-Ⅲでは平均下位の知能指数を示した．母子同席による心理教育を行った．その内容は「公とプライベートについて，その区別と大切な理由」とした．心理教育と並行で，B 子には問題行動 D を適応的状況で実施できた場合のセルフモニタリングをホームワークとして課し，それに随伴させる強化子を設定した．約 2 週間後の面接で，当該の問題行動 D は起きていないことが報告されたため，心理教育のまとめを行い，個別介入を終了した．ABA による介入が奏効した事例といえる．

本事例は，それまでのグループ活動による Th との関係性が良好に機能し，B 子かつ保護者の援助要請スキルが円滑に発揮されたことが問題解決の一要因だと考える．

（３）PERS-TR を用いた評価

本グループの参加者の中から5名の母親による評定結果を検証することができた．PERS-TR は，ピーク時（幼児期）と現在の得点が得られるため，この変動量を、“診断の有無”“現支援の内容”“現在の困っているいること・課題”等を用いて検証した。

ピーク時（幼児期）の平均値は 27,2 点、現在（思春期・成人期）の平均値は 22,6 点であった。図 2 にその変動量を示す。ピーク時は 5 名全員にASDが強く示唆されていたことがわかる。調査時（思春期）に得

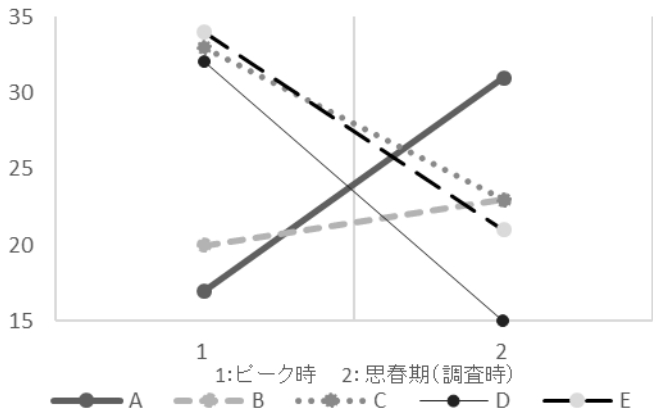

図2　PARS-TRの変化

点が下がったのは3名で、そのうち１名はASDの可能性は低いという結果となり、未診断のまま学生生活を送っていた。一方、ピーク時から得点が増加した2名は本対象者の中で最も得点が高くなった。この2名の保護者の子育て満足度は低くなっていた．さらに学校での支援もほぼ無い状態であった．特性に応じた学校での支援や療育機関での訓練の積み重ね等が効果的に機能している症例がある一方，PARS-TR 得点の大幅な減少が多いことは、女子事例の傾向であることも示唆している．ただ性差に着目した研究はさまざまな視点からなされているものの，結論付けることは難しい．定型発達児の性差を理解することも重要であったり，文化的な背景を考慮することも必要だったりするだろう.幼少期にASDの特性を示す女児の子育てに苦慮し，悩む保護者支援の重要性を支援者側は理解しておく必要がある.

<引用文献>

Fombonne, E.(2003):The prevalence of autism. Journal of the American Medical Association, 289：87-89
Shimone,R.(2010)：Aspergirls.（牧野恵訳（2011）：ルディ・シモン著，アスパーガール．スペクトラム出版,東京）
川上ちひろ（2012)：女性のASDの人たちの思春期の支援について,アスペハート 30：22-27
田ノ岡志保（2012)：女の子に必要なスキルの獲得に向けて―女の子グループでの7年間の活動を振り返って―　アスペハート 30：56－60

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3　件）

①佐田久真貴　皮膚むしりを主訴とする女子高校生に対する心理教育とセルフモニタリング－症例研究－．認知行動療法研究．査読有，44（3），2018．159‐169
②佐田久真貴　教育現場での「つなぐ支援」の大切さ．NEONATAL CARE．査読無　30(8)．2017.86-89
③佐田久真貴　発達障害女子のためのグループプログラムの実践報告－言語反応に焦点を当てて－．小児の精神と神経．査読有，56（2），2016．167‐176

〔学会発表〕（計　3　件）

①佐田久真貴　発達障害特性のある思春期女子のPARS-TRによる評価‐ピーク時（幼児期）との比較‐　日本特殊教育学会．2018
② Maki Sadahisa　Cognitive-behavioral therapy for nail-picking and picking of surrounding skin surface. The 47th European Association for Behavioural and Cognitive Therapies. 2017
③佐田久真貴　行動分析に基づいた介入を行った思春期ASD女子の２事例　日本小児精神神経学会．2016

６．研究組織

(1)研究代表者
研究代表者氏名：佐田久真貴
ローマ字氏名：(SADAHISA, Maki)
所属研究機関名：兵庫教育大学
部局名：学校教育研究科
職名：准教授
研究者番号（8桁)：10441479

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。